

東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): オランダ東インド会社による「宮廷旅行」の比較研究—日本、マラバル、ペルシア—

研究課題(英文): Comparative Study of VOC's "hofreis": Japan, Malabar and Persia

申請者名・所属先: 大東敬典・東京大学史料編纂所

海外招聘者名: レナルト・ベス Lennart Bes

1. 研究の目的

長崎出島のオランダ東インド会社商館長一行が江戸に赴き、将軍に拝謁し貿易許可の礼を述べ、献上品を呈する、いわゆる「江戸参府」は、近世日本の対外関係を規定する主要行事の一つとして精緻な研究が積み重ねられてきた。しかし、会社が一連の活動を「江戸への宮廷旅行 *hofreis naar Jedo*」と呼んでいたことには、なお注意を要する。会社の代表による政治的支配者の「宮廷 *hof*」への旅はアジアの他地域でも見られ、詳細な記録が残されたにもかかわらず、この共通点について、これまで十分に検討されてこなかったからである。そこで本研究は、「江戸参府」を「宮廷旅行」というオランダ語史料の文脈から再検討することを目的とした。

2. 研究開始当初の背景

オランダ東インド会社の「宮廷旅行」を比較する試みは、日本においては行われることはなかったが、これまでオランダを中心に海外の研究者によって行われてきた。近年では、異文化理解、物質文化の問題としても論じられている。しかし、そうした研究の多くに共通する視座は、オランダの「外交 *diplomatie*」であり、主たる関心は、オランダ(ヨーロッパ諸国)のアジア進出の成否および性格を明らかにすることにあった。したがって、「江戸参府」「外交」という日蘭両国の伝統的な問題関心や研究成果を踏まえつつ、新たな比較の観点を探ることが、本研究の重要な課題となった。

上記の課題を克服するため、申請者は、ヒューマニティーズセンターの支援を得て、オランダ・ライデン大学から、南インドにおける会社の外交活動を研究するレナルト・ベス氏を招聘し、日本人とオランダ人の研究者が初めて共同して会社の「宮廷旅行」の比較研究を行うという貴重な機会を得た。申請者とベス氏はそれぞれ、比較的研究が乏しいペルシアとインド・マラバル地方を対象に、研究に取り組むことにした。

3. 研究の方法

史料編纂所における共同研究には、オランダ国立文書館のホームページで電子公開されているオランダ東インド会社関係史料を活用した。比較の観点から江戸参府研究を参照し、以下の3点の検討を行った。

- ①関係史料の所在
- ②「宮廷旅行」という用語
- ③旅の基礎的事項



4. 研究成果

以下、申請者が得た検証結果を簡単に述べたい。

①関係史料の所在

江戸参府研究には、オランダ国立文書館所蔵「日本商館文書 *De archieven van Nederlandse Factorij Japan*」が主に用いられてきたが、「日本商館文書」はオランダ東インド会社の出先機関に保管された文書群が伝存する珍しい例である。ペルシアにおける会社の活動については、他の多くの地域と同様、当地の商館から発送され、最終的に本国で受領された文書が主要な情報源であり、その大部分が、同館所蔵「オランダ東インド会社文書 *Het archief van de Verenigde Oost-Indische Compagnie, 1602-1795*」に収められている。ペルシアへの宮廷旅行に関する文書も「オランダ東インド会社文書」に多数含まれていることを確認した。

②「宮廷旅行」という用語

「日本商館文書」には「宮廷旅行 *hofreis*」という用語が広く見られるのに対し、ペルシア由来の会社文書においては、「宮廷 *hof*」「旅 *reis*」あるいは「旅する *reizen*」などの言葉は単独に用いられているものの、「宮廷旅行 *hofreis*」という合成語の使用を確認することはできなかった。この点はさらなる検討が必要であるが、本研究を進めるにあたり、何をもち「宮廷旅行」と見なすべきかという問題が生じた。そこでひとまず、「宮廷旅行」を「ペルシアの王の宮廷への旅、あるいは王がいる場所への旅」と定義した。またそうした旅の記録は非常に多く存在するため、「宮廷旅行の記録」を「王のもとへの旅の全行程の記録」に限定した。その結果、10点あまりの文書が存在し、「日記 *dagregister*」と「経費計算書 *onkosten rekening*」という2種類に分類できることが判明した。これらの史料は、「日本商館文書」における「オランダ商館長日記」「参府経費計算書」にそれぞれ対応すると思われる。

③旅の基礎的事項

ペルシアへの宮廷旅行は、実際に行った会社代表の立場、旅の経路・頻度の点で多様であった。大使 (*ambassadeur*)、使節 (*commissaris*) といった特別な肩書を帯びた者が、会社のアジア経営の拠点バタヴィアから派遣されて行くこともあれば、ペルシアにおいて指導的立場にある者 (*directeur* など) が行くこともあった。またその時々王の所在により、王国の首都イスファハーンへ旅することもあれば、北部の都市カズヴィーンを目的地とすることもあった。旅は定期的に行われたわけではなかった。その一方、宮廷旅行の多くは、商業特権の獲得および更新という共通の目的を持っていた。全体的に見ると、江戸参府が定式化し始める 1640 年代後半以前の日本の状況と似ているようである。

その他の比較の論点として、現地政権による陸路の安全保障や援助が挙げられる。ペルシアへの宮廷旅行の経費は基本的に会社負担であったが、会社が獲得した特権の中には、王が国内の役人に対しオランダ人の旅を支援するよう命じるものなどが含まれており、それらが実際に宮廷旅行を促進していたことがわかった。この点は日本も同様であった。今後他地域の事例とも比較してみたい。

2023 年 3 月 29 日、ヒューマニティーズセンター第 90 回オープンセミナー「オランダ東インド会社の「宮廷旅行」—日本、インド、ペルシア—」を東京大学とオンラインのハイブリッド形式で開催し、共同研究の成果報告を行った。セミナーには、ヒューマニティーズセンターの支援により、イギリス・ウォーリック大学からヒド・ファン・メールスベルヘン氏も招聘することができた。メールスベルヘン氏は、ムガル朝インドの事例から、会社の宮廷旅行の



比較分析のための様々な提案を行った。平日昼間の開催にもかかわらず、現地参加約 25 名、オンライン参加約 50 名と多くの参加者に恵まれ、総合討論では、登壇者との間で1時間におよぶ充実した議論が行われた。学術的にも国際交流の面でも稔りある会となった。冒険的な企画にもかかわらず、本研究をご理解、ご支援くださったヒューマニティーズセンターの皆様に、心より感謝申し上げます。

5. 主な発表論文等

〔図書〕

なし

〔雑誌論文〕

【大東敬典】

投稿予定

【Lennart Bes】

Based on my research in Japan funded by the Humanities Center, I am presently focusing my research on the subject of female political power in 17th- and 18th-century Kerala (Malabar, India), aiming to publish an article on this topic within two years.

〔学会発表〕

【大東敬典】

パネル報告申請中

【Lennart Bes】

* ‘Working together on the history of cross-cultural diplomacy’ [comparing VOC embassies to Japan and to south Indian courts], at a Humanities Center event, 26 May 2022.

* ‘*Hofreizen* in south India as windows to the power of Indian courtiers’, at a Humanities Center event, 29 March 2023.

* 9 presentations on the structure and contents of VOC records concerning Kerala, at various universities, congresses, and workshops in Kerala (Thiruvananthapuram, Kochi, Kalady, Aluva, Paravur, Thalassery, Kozhikode), 9 January – 2 February 2023.

〔その他〕

なし

6. 招聘フェロー(海外招聘者)からのコメント

My research at Tokyo University’s Historiographical Institute was part of a project with Daito Norifumi (Historiographical Institute), focusing on *hofreizen*: embassies of the VOC (Dutch East India Company) to Asian royal courts. While I stayed in Japan, I studied such embassies to courts in Kerala (Malabar, south India). During the VOC’s presence there (seventeenth–eighteenth centuries), Kerala consisted of about 50 kingdoms, with which the Dutch maintained commercial and diplomatic relations and regularly exchanged embassies. The VOC archives contain at least 50 reports of those embassies, mostly covering 20 to 30 pages. I transcribed or summarized nearly 40 such reports, dating from the 1660s–1740s. In addition, I transcribed dozens of other VOC documents, mostly *memories van overgave* (reports of departing Dutch governors) and correspondence, both



ヒューマニティーズセンター
Humanities Center

internally and with Kerala rulers. These documents revealed a wealth of new information about politics, dynasties, courts, warfare, diplomacy, ceremonial, temples, and so on in Kerala, as well as about the VOC's presence there and its interaction with the region. My research also revealed the exceptional character of Kerala's VOC archives, especially the very close, direct information they provide on the region, exemplified by a unique document category specifically devoted to Kerala's political developments (*inlandse dagregisters*). I wholeheartedly thank the Humanities Center for funding this unique research opportunity.